



News Letter

中央学院大学社会システム研究所

Research Institute

2026.1.30

第27号

〒270-1196 千葉県我孫子市久寺家 451
Tel: 04-7183-6522 / Fax: 04-7182-1312
URL: <https://www.cgu.ac.jp/socialsystem/>

C O N T E N T S

• JIBSN 与那国セミナー 2024 に参加して —境界地域の立ち位置をめぐって—	2
• トランプ時代の米国と世界	4
• 逆立ちはやめよう！	5
• 映画『海辺の彼女たち』を観る	6
• 『時代のあだ花か？』 —戦後与那国島のダイナミズム—	7
• アイヌ民族の歴史を紐解いて！	9
• 街場の寿司屋の観光立国	11
• 群馬県太田市、県内初となる『ヘイトスピーチ禁止』を明記した条例施行へ	12
• 神楽坂から発信する『本物』の日本伝統文化体験 —日本の魅力を世界に伝える山田氏の取り組み—	15
• 豊田堰（小貝川）を訪ねて	17
• 日本人ファースト	19
• 『見えない壁 北方四島の記憶』を刊行して	20
• 健康超人と神童に出会って！	21
• 映画『てっぺんの向こうにあなたがいる』を観ましたか？	23

JIBSN 与那国セミナー 2024 に参加して「境界地域の立ち位置をめぐって」(2025年1月8日掲載)
プロジェクト研究「危機の中の境界地域—稚内・根室・八重山列島を事例として」

中央学院大学社会システム研究所 法学部教授 土屋 耕平



2023年度から開始された中央学院大学社会システム研究所のプロジェクト研究「危機の中にある境界地域—稚内・根室・八重山列島を事例として」の一環として、沖縄県与那国町で2024年10月12日に開催されたJIBSN 与那国セミナー 2024 与那国に参加した。「境界地域のなかに光をみる」がセミナーの主題である。境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) が主催するセミナーに私が参加するのは昨年に続き2回目となる。JIBSNは、Japan International Border Studies Networkの略称である。JIBSNの目的はその規約では、我が国及び外国の国境又はそれに準じる隣接領域(以下「境界地域」という。)に関する調査及び研究を行い、その専門的知見の共有を通じて、境界地域の抱えるさまざまな課題に適切に対処し、その発展に寄与することである。そして、学際的な領域にまたがる境界研究と地域に根付く実務を連携する新たな社会的貢献をしていくことを目指している。

境界地域研究ネットワーク JAPANは、大学などの研究機関だけでなく、自治体が構成員となっているのが特徴である。加盟しているのは、稚内市、対馬市、根室市、小笠原村、五島市、竹富町、与那国町、隠岐の島町、標津町、礼文町の10市町村である(受付順)。なお、中央学院大学社会システム研究所も本プロジェクト研究が開始されると同時に、境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) に加盟し、日本全国の境界自治体や

研究機関と連携を強化している。

このセミナーでは2つのセッションが設けられたが、ここではセッション1の「砦とゲートウェイ：境界地域の課題」を取り上げたい。与那国町長、標津町副町長、対馬市副市長、根室市北方領土対策部長、それぞれから報告があった。ここでいう「砦」とは、これらの自治体には、自衛隊の駐屯地などが置かれており、日本国を防衛することを主たる任務としている自衛隊の部隊が配備されていることを指している。また、「ゲートウェイ」は、国際交流などにおける入口や関門などを意味している。外国人観光客などが日本に訪れる玄関口を表す面がある。

セッション1で報告した自治体の中で、最も新しく自衛隊が配備されたのが与那国町である。誘致推進派の現職(当時)が47票差で当選した2013年の町長選挙も陸上自衛隊の部隊誘致の是非が争点となったとされるが、2015年には陸上自衛隊沿岸監視部隊配備の是非を問う住民投票が行われ、投票率は85.74%で、賛成が632票、反対が445票であった。条例に基づくものなので住民投票の結果に法的拘束力はなかった。このような自治体での政治過程なども経て、2016年に自衛隊が配備された。

糸数健一与那国町長からは、主権を守ることなしに住民の生命や財産は守れないとの趣旨の発言や自衛隊に関して最低限の拠点はできたのではないかとの見方も示された。他方で、「ゲートウェイ」としての立ち位置が欲しいのに、やむなく「砦」としての役割を担わされているとの見解も明らかにしていた。与那国町としては本来、外国人などが日本に訪れる玄関口として役割を果たしていきたいにもかかわらず、近年の中台関係の情勢がそれを妨げているという認識があるように思われる。町長からは、台湾の離島のような感覚で台湾の人に与那国島に来てもらいたいとの趣旨の発言もあった。

標津町や根室市の報告では、北方領土への渡航をめぐる課題などについて説明があった。こちらは、ロシアによるウクライナ侵攻が大きな影響を及ぼしている。元島民及びその家族による墓参のための訪問である北方墓参、日本国民と北方四島在住ロシア人との相互訪問である北方四島交流(「ビザなし交流」)、元島民及びその家族によるふるさとへの訪問である自由訪問、これら全てが現在実施されていない。報告では、北方墓参だけでも早期再開を求める意見があったのに加えて、北方四島交流は1992年から始まっており、約30年間の交流で築かれた隣人同士のつながりは閉じきれものではないとの見方も示された。北方領土の返還を引き続き強く求め続けるとともに、隣国ロシアとの適切なつきあい方を探っていく必要があるとの意見も出されていた。

紹介してきたように、境界地域は外国との間の日本の玄関口として機能する面もある。しかし、日本を取り巻く国際関係のあり方によっては、境界地域の自治体が要望していたとしても、交流をはじめとする日本の玄関口としての役割を必ずしも担えないことがわかるのである。対馬市からも、日韓関係が冷え込むと韓国からの観光客が減るのではないかとの発言もあった。その点に関してさらに言えば、国境観光や境界地域の観光などを指すボーダーツーリズムは、境界地域の自治体にとって地域振興に貢献する大きな可能性があるものの、国境を移動できなければ、日本の最果ての辺境と

いう立場に戻ってしまうおそれもある。本プロジェクト研究では、日本の境界地域を取り巻く現状と課題を比較分析することによって国家間関係や地域情勢の悪化の影響を受けるメカニズムを明らかにし、今後の展望と活路を見出すことを目的としている。引き続き、境界地域の自治体が国際関係などから受ける影響などについて研究を進めていきたい。



トランプ時代の米国と世界 (2025年1月9日掲載)

プロジェクト研究「グローバルデザイン」

一般社団法人 日本グローバルイニシアティブ協会 綿貫 雅一



2024年11月6日(水) フロリダ州パームビーチのコンベンションセンターで勝利宣言をするトランプ前大統領。
AFP

2025年の年初を迎えるにあたり、世界の動向に大きな影響を及ぼす米国発のトップニュースを取り上げたい。これは言うまでもなく、1月20日に就任する米国第47代大統領となるトランプ政権の行方である。

この背景には、複数の要因が複雑に絡んでいる。ソ連崩壊後、米国は世界の超大国として国際政治・経済、外交において圧倒的な地位を確立してきた。21世紀に入ると、国際協調が進み、グローバル化が大きく進展し、米国は最大の恩恵を受ける受益国となり、その経済は顕著に成長した。

しかしその一方でグローバル化の進展は、社会全体に負の影響を及ぼす結果を招いた。減税や規制緩和といった経済政策は、富裕層や企業に利益をもたらす一方で、低所得層や中間層には恩恵が少なく、経済的不平等が拡大する要因となった。特に顕著な影響は、富の不均衡と格差の拡大である。上位10%が全体の所得の約50%を享受し、上位1%の所得層は約20%を占めている。この状況により、アメリカンドリームは庶民には手の届かない遠い過去の遺産となってしまった。

政治の面でも、一部の特権階級によるエスタブリッシュメントが中間層を没落させ、ラストベルトと呼ばれる地域では深刻な低賃金、失業や倒産が相次ぎ、グ

ローバル化を推し進めてきた政治経済に対する不満が鬱積していた。

そんな中、「アメリカ・ファースト」を掲げるトランプの公約が、経済的不利益を被っていた保守的中间層に訴えかけ、政治経験のないビジネスマン・トランプが第45代大統領に選出された。これは米国の政治経済の分断が、如何に深刻化しているかの表れである。

本来、米国の誕生は、欧州の圧政に苦しむ民衆が自由と平等を求め、長い苦難の末に勝ち得た勝利である。建国後、米国は自由、平等、民主主義を崇高な理念として掲げ、典型的な民主国家としての地位を確立した。戦後、米国は自由と平等、民主主義を世界に広げる守護神であり、世界の手本とされ、多くの国々から憧れられ、尊敬されてきた。

現在、この理想とされていた本来の米国がトランプ2.0の中で大きく変容しようとしている。トランプイズムは、極端な一国主義と保護主義的な政策である。経済的には企業や富裕層に対する減税を強調し、経済成長を促進することを目指しているが、日本を含む外国製品に高い関税を課し、国内産業を保護する方針がある。外交面では、国際協調ではなく一国主義のもと、アメリカの利益を最優先するアメリカ第一主義が展開される。これにより、国際間の緊張と対立がさらに助長されることが懸念される。これは、米国に留まらず世界的なインフレの波の要因とも考えられる。また外交がビジネスのディールの手法で行われる可能性も高まるであろう。

トランプ時代は、アメリカ国内だけでなく、世界中に多大な影響を及ぼす。特に、日本をはじめとするアジア諸国にとって、その影響は無視できないものとなるだろう。2025年からはこの変容がさらに加速すると考えられ、私たちは新たな時代の波に直面することになると考えられる。即ちトランプ時代は、世界が大きな岐路と転換期を迎える中で、変化を促進する要因となる可

能性が大きい。国、企業、個人は、このVUCA時代において柔軟に対応し、未来を見据えた戦略を構築するこ

とが求められる。私たちは、変化の波に乗り遅れないよう、挑戦を恐れず、適応していく必要があるだろう。

逆立ちはやめよう! (2025年1月31日掲載)

プロジェクト研究「グローバルデザイン」

中央学院大学社会システム研究所教授 福嶋 浩彦

「地方創生」は石破内閣の看板政策だ。地方への交付金も大幅に増額するという。地方を盛り立てることに異議はないが、自治・分権とセットでなければ、自治体はますます逆立ちする可能性がある。つまり、自分の自治体の住民の幸せのために何をすればよいか、地域を良くするために何が必要かを必死で考えるよりも、どんな計画を立てれば国の了解をもらえるか、どんな事業をやれば国からよしよしと言われ交付金をもらえるかを考える。自分の住民より国のほうばかり見る自治体がさらに増える心配がある。

自治体の内部でも、残念ながら多くの逆立ちがある。「人口減によって税収が減るので行政だけではサービスを維持できない。民間との連携が大事だ。」と言う。ちょっと聞くとその通りにも思えるが、よく考えると逆立ちしている。

民間と連携するのはお金が無いからか？ 民間の能力は高い。民間と連携したほうがサービスが充実し地域の質が良くなる。つまり、住民が幸せになるから連携するのではないのか。お金が無いのは事実かもしれないが、仮にお金が余っていたとしても、民間と連携したほうがよいはずだ。行政のアウトソーシングも、住民のため質の向上をめざしたアウトソーシングと、コスト削減という行政の都合によるアウトソーシングでは、中身が違って来る。前者は、結果的に財政面でも効果を生むが、後者は、質の劣化など様々な歪みが生じる。

逆立ちは住民にも広がる。NPOの皆さんから「行政には予算がなく人も足りないから、我々が行政に

代わって担ってあげている。」という話を聞く。たしかに現実には、行政が本来やらねばならないことをやっておらず、どうしようもなく肩代わりするという場面もあるだろう。しかし、原理は逆だと考える。NPOや民間ができることは、もともとNPOや民間がやることなのだ。NPOや民間ができないことを、税金を払って行政にやらせている。行政ができないことを、NPOや民間がやっているのではない。こうした様々な逆立ちをやめて、しっかりと自分の足で立ちたいと思う。自分の足で立つということは、国家や行政から出発するのではなく、生活者である住民から出発するということだ。それができるのが自治体である。

住民から出発する地方自治が本当に実現したとき、外国人住民も地域づくりの対等なパートナーになるだろう。地方自治が国や行政から出発しているかぎり、外国人住民はあくまで不足する労働力を補うための存在であり、その範囲でサービスを受ける人にとどまるだろう。

なお、補足で解説しておけば、地方自治法では自治体内に住所を有する者を「住民」としており、住民には外国人も含まれる。たしかに、選挙権をはじめ参政権を定めた条項は「日本国民たる住民」に限定している。しかし、広く行われている住民参加・参画においては、外国人も地域の一員として、あるいは納税者として、行政サービスに意見を述べたり、住みよいまちにするために共に考えたりする権利が保証されねばならない。

映画『海辺の彼女たち』を観る (2025年3月5日掲載)

プロジェクト研究「グローバルデザイン」

共愛学園前橋国際大学国際社会学部教授 西舘 崇

入れた矢先にフォンが体調を壊し倒れてしまう。アンとニューは満足に仕事ができないフォンを心配して、身分証が無いままに病院に連れて行くが――

ネタバレになってしまうのでこの先は詳述しないが、同ホームページの紹介欄には「外国人労働者たちの実話をもとに描く圧巻のリアリズム」とあるように、技能実習生らが抱える問題の一端が三人の様子やブローカーの言葉、雇用者の言葉などから如実に描かれていたと思う。そしてそうした実態がまさにここで言う「リアリズム」の具体像であるように感じられた。

しかし、筆者はこの映画にはもう一つの“隠れたリアル”があったように考えている。それは「沈黙」である。映画を注意深く観ていくと、全編を通して言葉や会話が少ないことに気づく。代わりに聞こえてくるのは車の音やバスの音、風や波の音、火がぱちぱちと燃える音、スープをすする音などである。衝撃はラストシーンであった。筆者を含め、視聴者の多くが主人公の置かれた状況に対して何らかの説明なり、解釈なりを求めていたように思う。「何か言葉がないと救われない」と思うほどに、辛く悲しい現実があったのだ。しかし登場人物たちからは何の言葉も発せられないまま、映画は静かにエンドロールをむかえた。

上映後、藤元監督本人から挨拶があり、驚きの事実が伝えられる。ラストシーンについては当初、三人の会話が予定されていたとのこと。しかし、映画を撮っていくうちに、自然と会話がなくなったようである。役を演じた三人も言葉を失いながら、その現実に向き合っていたのかもしれない。

映画は2018年から2019年の間に撮影されたという。その後の2020年にはコロナ危機が日本を、そして世界を覆った。影響を受けなかった人などいないと思う。来日中であった技能実習生たちも例外ではない。本作の公開は2020年だが、コロナ禍のために上映の機会も限られていたのではないかと。それがふっとわいたように、群

馬県の伊勢崎にて、この3月、上映された。

偶然のようにみえるが必然なのだろう。この機会を演出した二人の若者がいる。相沢正雄氏と山本雄次氏である。相沢はペルー出身で、伊勢崎市に来て25年。映画祭の主催企業会長を務める。この相沢をアミーゴと呼ぶ山本はベトナム出身で、伊勢崎市に来て35年。難民として来日し、現在は伊勢崎市内で人材派遣業、通訳業などを展開する。二人の協力関係はコロナ禍をきっかけに始まったようだ。共通する問題意識は伊勢崎市における多文化共生社会の実現である。同市は群馬県内最大の外国人住民数を誇る。その数は16,000人以上であり(2024

年12月現在)、国籍別ではベトナム出身者が最大となっている。その数は昨年、ブラジル出身者数を超えた。

映画祭の会場となった文化センターの小ホール(席数は200前後)は7割、8割が埋まっており、ベトナム語やスペイン語が飛び交っていた。会場を埋め尽くすのはベトナム出身者、ペルー出身者がメインだったように思う。日本人は少数のようにも思われた。映画の後は、ダンスありライブありのお祭りであった。多様性の持つ現実も可能性も含めて、包み隠さずに全てあふれ出てくるような映画祭であった。素晴らしい学びの機会に感謝したい。

『時代のあだ花か?』 ―戦後与那国島のダイナミズム― (2025年3月17日掲載)

プロジェクト研究「危機の中の境界地域―稚内・根室・八重山列島を事例として」

一般社団法人与那国町観光協会 事務局長代理 小嶺 長典



写真提供：与那国町史写真集(沈黙の怒濤)より久部良発電所の内部。上陸用船艇のエンジンに発電機をつけ久部良集落約300世帯に電気を供給していた。

あの約5年間にも及ぶ激動と言っても過言ではない喧嘩はいったいなんだったのか。遡ること約80年前、終戦を機に与那国全体がざわついた時期がある。東京から南南西へ約2,100キロにある日本の最西端与那国島からは、晴れた幾ばくかの日、遙か西方に台湾の島影を望むことができるが、周囲わずか28キロの断崖絶壁に囲まれた絶海の孤島である与那国島がその舞台となった。第二次世界大戦後、敗戦の混乱のなか都市部を中心に日本全体で、食料や生活必需品が極端に不足するなど

世の中が騒然としていた。そうした状況のなか、台湾と国境を接するほぼ無政府状態の与那国島は、台湾を中心に中国福州、厦門、香港、さらには東南アジア諸国、韓国、日本阪神方面、沖縄本島等との物資のバーター取引の中継基地となり、わずか数トンから30トン前後の木造船、鋼鉄船等を駆使し、人、物、金が離合集散するダイナミックな交易活動の中心として文字通り密貿易の島となった。

戦後それは自然発生的に始まった。敗戦の翌年から物資の交易市場となり、米、砂糖、を主体とする食料品が台湾から流れ込み、その見返り物資として阪神方面から日用雑貨、沖縄本島からは米軍の横流れ品、毛布、たばこ類が持ち込まれた。日本人、沖縄人、台湾人などが各人各様の方法で物資の取引のために島に集まった。通貨はなく、すべて現物バーターで決済され、その基準は需給バランスから自然に確立されていった。当初、突船と呼ばれる漁船が物資の輸送のために動員され、荷役の労働者は地元だけではカバーできず、石垣や宮古島からも流入し、賃金は、日本円、B軍票、台湾円で支払われた。久部良港を中心に始まったこの密貿易によって敗戦後直後の人口は、交易が本格化するにつれ、約3,000人か



3月2日(日)、伊勢崎市にて開催された「ベトナム映画祭 in 伊勢崎」に行ってきた。上映されたのは日本・ベトナム共同製作映画『海辺の彼女たち』(2020年)である。脚本・監督は藤元明緒氏(1988年生まれ・大阪府出身)。日本に住むミャンマー人家族の物語を描いた映画『僕の帰る場所』(2018年)が東京国際映画祭「アジアの未来」部門で受賞するなど、注目の新人映画監督である。

『海辺の彼女たち』のストーリーだが、映画の特設ホームページによれば次のように記されている。

「技能実習生として来日した若きベトナム人女性のアンとニューとフォンはある夜、搾取されていた職場から力を合わして脱走を図る。新たな職を斡旋するブローカーを頼りに、辿り着いた場所は雪深い港町。やがては不法滞在となる身に不安が募るも、故郷にいる家族のためにも懸命に働き始める。しかし、安定した稼ぎ口を手

ら最終的に1万5,000人に膨れ上がった。

久部良集落は、米軍流出の自家発電機で終夜明かりが消えることなく、レストラン、小料理亭が開店し弦歌さんざめく不夜城となった。交易の規模はますます拡大し、物資の種類は多様化し、本土からは杉板などの建材から漁具類、沖縄本島からは米軍服、自動車のタイヤ、ドラム缶、葉きょうなどが大量に流れ込み、中身の分からない梱包物も多数あったという。大型船から、中国方面からやってくるジャンク船、300トンかそこのさびた鋼船が与那国島沖に集まった。当初は日本と台湾の交易から始まったが、規模が拡大するにつれ、様々な国の船が集まり、船員もそれぞれの国の服装、言語が飛び交う国際都市の様相を呈していた。敗戦により行政機能が麻痺し、米軍の監視も及ばないほぼ無政府状態のなか、烏合の衆がはびこるこの島は必然的に治安が乱れ、犯罪が発生しはじめた。



密貿易に使用された漁船“大宝丸”。密貿易終焉後も昭和40年代までカツオ漁船として活躍した。
白鳥正行氏提供

敗戦直後、台湾在住の日本人の本国への引き上げが始まるが、引き揚げ者のなかに与那国出身者の人々も数多くおり、裸同然で脱出した引き揚げ者は島へ戻った後の生活の備えに、米などの食料品、衣類、日用品を持ち込むようになった。しかし、戦争で島は焼かれ、食料もなくマラリアで島全体が瀕死の状態にあり、持ち帰った食料品はすぐに底をつくことになる。そして食料を確保するために、危険を顧みず再び台湾を目指す。これがこの島の密貿易の始まりであった。次第に台湾からの脱出が困難になるにつれ、与那国出身以外の人々の脱出も与那国島経由となり、戦後日本全体が食料・物資不足のなか、与那国島が台湾との密貿易ができる唯一の拠点とし

て注目された。生きていくための食料などの確保からはじまった台湾との密貿易は、そこに活路を見いだす商人等により交易は活発になり、食料以外のさまざまな物資が持ち込まれるようになると交易はますます拡大していく。

これがわずかな期間ではあるとはいえ、大密貿易時代のはじまりであった。戦前密貿易の拠点であった与那国島の久部良地域は、明治時代以前は家屋が疎らにあるアザンの生い茂った牧場であったし、現在の久部良集落の開拓は明治の終わり頃から大正時代に入ってから行われた。黒潮の流れの中にある与那国島は、カツオやカジキ、マグロが豊富にとれる好漁場が近く、島民らは細々と漁を営んできた。この好漁場に、鯨節製造を生業としてきた人々を中心として、鹿児島、宮崎、高知、静岡、さらに沖縄の糸満、久高、宮古などの漁師や業者等が移住し、鯨漁や鯨節製造が始まり久部良地区は開拓されていく。昭和の初期には「発田鯨節製造工場」により、施設面や生産量ともに東洋一といわれるまでに与那国の鯨節製造業は発展し、島を賑わせた。与那国・久部良漁港が敗戦直後から急速に密貿易の拠点として発展したのは、戦前の鯨節製造業を中心としたとくに操船技術のある人材や流通事業者の存在、漁に使用する船舶等の流入がなければ成り立たなかったと考える。



整列する米軍の兵士たち（密貿易取り締まりの一環と推定される）
与那国町史写真集（沈黙の怒濤）より

“終焉”それは突然にやってくる。昭和25年5月、米国CIC（戦闘指揮所）指揮官オール大尉一隊による密貿易現場の急襲である。一隊は約20日間で密貿易関係者、物資、船舶などのその組織を根こそぎ壊滅させ、事

後処理を軍事裁判に引き継ぎ与那国を去ったのである。

戦後の何もかもが不足する中、生きていくために自然発生的に始まった密貿易であるが、そこに活路を見いだした者、お金の匂いに引き寄せられた者らがその密貿易に目をつけ集結し、様々な物々交換がはじまったのであるが、次第にその対象物は膨れ上がっていく。米軍も当初は与那国島の密貿易については見て見ぬふりをしていたが、物資の中に米軍の横流れ品、武器等も含まれるようになり、プレーキの利かない暴走の様を呈していた。

ちょうどその頃、1945年から始まった中華民国国民政府と中国共産党による第二次国共内戦、1950年から始まる朝鮮戦争に対して、密貿易で国外へ流れ出た米軍の武器等が流出していた。情報をキャッチした米軍は、与那国島の密貿易が絡んでいることを突き止め警戒する

アイヌ民族の歴史を紐解いて！（2025年3月18日掲載） プロジェクト研究「グローバルデザイン」

中央学院大学社会システム研究所客員研究員 青木章

皆様、はじめまして！

昨年中央学院大学社会システム研究所の客員研究員になりました前我孫子市副市長の青木章と申します。私は、昨年3月31日をもって副市長の職を退き、一般職の時代から通算して半世紀を超える「公務員人生」にピリオドを打ちました。

私は、多くの人に接し、様々なお話を伺う中で、『人は、ある程度生活が安定すると、社会に貢献することを考えるようになる。』との考えに至り、そうであるならば、『仕事（生業）で社会貢献できれば、こんな幸せ者はいない。』という結論に達し、民間企業（福沢諭吉の愛弟子が明治期に設立した会社）から我孫子市役所に転職しました。以来、半世紀にわたり我孫子市政に関わり、日本で唯一の「鳥の博物館」の発想から建設、開館に関わったほか、様々な施策に関わってきました。どうぞよろしく願いいたします。

アイヌ民族の歴史を紐解いて

私は、20歳の時に、はじめて北海道に行きました。

ようになるが、与那国島で展開する多種多様な交易は止まることを知らず、業を煮やした米国軍政府の摘発へとつながっていったのである。与那国島の密貿易はこれをもって終息に向かう。密貿易は島の経済、行政、教育その他の面でも計り知れない影響があったが、そのおかげもあり与那国島は沖縄諸島の中でいち早く復興したのである。

このエッセイは、あの時代を生き抜いた与那国出身の故大浦太郎氏の回顧録「密貿易島」にもとづき執筆した。この回想録を読み、この小さな島のダイナミックな歴史の一部を垣間見た気がする。大浦氏は回想録の最後で、その時代のことを「槿花一朝」の夢であったと結んでいる。いまでは南海の孤島与那国島で興った、映画でみるような出来事を語るができる人物は少ない。

千歳空港に降り立ち札幌までタクシーで行きました。今思えばちょっと贅沢な旅行だったかもしれません。

その時のタクシーの運転手さんの言葉が忘れられませんが、「私たちアイヌは、十分な教育も受けられず、タクシーの運転手くらいしか働くところがないんです。」という言葉でした。

アイヌ民族の存在は知っていましたが、日常生活の中で、アイヌとの関わりは、全くありませんでしたから、この言葉が、どうしても忘れられず、頭の中に残ってしまいました。

小さい頃から西部劇は見ていましたから、アメリカでは、先住民族であるアメリカインディアンと白人との争いのあることは承知していましたが、今のこの日本で、先住民族であるアイヌ民族との間に、今もって差別や偏見があることに驚きました。

この体験があったので、自由な時間ができたら、アイヌ民族の歴史を調べてみたいと思うようになりました。2020（令和2）年に、国立の施設である「ウポポイ（民

族共生象徴空間)も完成しましたので、退職を機に、昨年、10月末に二泊三日で、久しぶりに北海道に行ってきました。以前の「白老アイヌコタン」とは大きく変わっていました。立派な博物館としての施設と相変わらずのチセ(アイヌの伝統的な住居)が建っていました。ツアーで行ったものですから、「ウポポイ」で十分な時間が取れなかったため、書籍を購入し、今年に入ってやっと時間ができ、少し勉強しました。

アイヌの歴史は、同時に北海道の歴史であり、樺太・千島列島の北方民族の歴史でもありました。

また、昔から樺太やアムール川下流域、沿海州などで、ロシアやモンゴル(元)、中国と深い関りがあったこともわかりました。

中でも、一番に感じたことは、和人が先住民族であるアイヌに対し、長い時代にわたって、アイヌ民族の伝統や文化、生活習慣、誇りを破壊し、同化政策を進め、差別や偏見をしてきたことでした。

その詳しい内容は、長くなりますので、別の機会に譲るとして、かなり減ってきたアイヌ人の今の状況が気になります。

直近の調査資料は見つかりませんでしたが、2013(平成25)年の調査では、アイヌの人口は、約1万7000千人という数字があります。これは、北海道の各市町村が把握できた人数であり、差別や偏見を恐れて、自らアイヌ民族であることを明らかにしていない人も、全国には大勢います。もちろん、俳優の宇梶剛士さんのように、自らアイヌ人であることを明らかにしている人も、ごく少数ですがおられます。

また、「アイヌのみなさんが、政府に対しどんな施策を望んでいるか?」との、先住民研究センターが、2008(平成20)年に行った調査報告書を見ると、「ア

イヌ民族に対して高校・大学進学や学力向上への支援」など、アイヌ民族に対する教育についての項目が上位にあり、未だにアイヌ人の向上心が読み取れます。53年前のタクシーの運転手さんの言葉が、今でもアイヌ人の最も強い願いとなっていること、何十年も変わっていないことに驚きました。

日々の生活の中で、唯一アイヌとの接点を感じるのは、地名や食べ物などです。

我孫子市でも、「中峠(なかびょう)」や「日秀(ひびり)」、「都部(いちぶ)」、「岡発戸(おかほつ)」、「稲荷峠(とうかんばん)」などの読みづらい地名は、アイヌ語との説があります。

また、「四万十川」の語源が、アイヌ語の「シ・マムタ(はなはだ美しい)」からきているという寺田寅彦の説がありますが、これは、本人も言っているように、あくまで仮説であり、地理的なもの(南方には、熊襲などの別の先住民族がいたのでは?)との思いからも信じがたい。食べ物では、最も有名なのが昆布です。アイヌ語では「コンブ」といい、中国に渡り「コンブ」となり、日本に逆輸入されて、「昆布」になったという説が有力です。そのほかにも、「サケ」や「シシャモ」、「ラッコ」、「トナカイ」などがあります。

今世界では、民族問題に端を発した戦争や紛争が起きていますが、日本では、そのような不幸なことが無くてよかったと思うと同時に、「アイヌ」や「熊襲」などの日本列島の先住民族に目を向け、差別や偏見の問題について、今一度認識を改めなければとの思いになりました。アイヌ民族に関する施設は、北海道内に24施設、北海道以外に8施設ほどあります。今一度アイヌ民族の文化を見直してみませんか!

街場の寿司屋の観光立国(2025年4月7日掲載) プロジェクト研究「グローバルデザイン」

中央学院大学現代教養学部教授 中川 淳司

寿司組合が見学に来ました」と、大将が問わず語りに教えてくれた。「自分は70で引退するつもりやったんやけど、息子がもっと頑張れ言いましてな。」そやそやと息子さんがうなづく。

京都市の寿司組合が見学に来るのも無理はない繁盛ぶりである。でも、K寿司のビジネスモデルを真似るのは容易なことではないだろう。大将の握るような値ごろでうまい寿司やつまみを出せる店は他にもあるだろう。しかし、息子さんの分け隔てのない気持ち良い対応を、それもこなれた英語で提供できる店は、京都広しといえどもまず見当たらないのではないかな。

満足した客はSNSに好意的なコメントを寄せ、そのコメントを読んだ外国からの客が店を訪れて感動し、SNSに重ねてコメントする。カウンターで私たちの隣に座ったお客さんはメキシコから来た。SNSで「京都に行ったら必ずK寿司に」と教わったとのこと。この好循環を、自前の土地と店で家族主体で地道に営業するお店の温かな雰囲気も支えている。観光立国の秘訣は案外このような単純なことに尽きるのではないかなと思う。

今回、初めて息子さんから名刺をもらった。そこには誇らしげに「K寿司三代目」と肩書が書かれていた。心強いことである。お店は安泰。私たち夫婦の暮れの楽しみも続くことだろう。

年の瀬も押し詰まってから家内と二人、京都に旅行するのが恒例となっている。昨年暮れも、定宿の二条城近くのAホテルに滞在して、街歩きを楽しんだ。チェックインしてからホテルのプールでひと泳ぎし、サウナで汗を流してから、これも行きつけのホテル近くのK寿司さんを訪ねた。古希を過ぎた大将とおかみさん、息子さんと焼き物・洗い場の手伝いさんが二人、気の置けない街場の寿司屋である。大将手作りの鮎寿司に舌鼓を打ち、炙り穴子と鯖のきずし(生寿司)に茶わん蒸しで熱燗をやってから、お任せで握ってもらい、大満足でホテルに戻った。勘定は東京の寿司屋の半額といったところである。でも、値段が手ごろで味が良いから通うようになったわけではない。

寿司を握るのは大将一人である。でも、この店を支えているのは、実は息子さんである。英語が大好きで、大学もその方面に進み、英語の教員資格を持っている。彼がこなれた英語で外国からのお客さんを気持ちよくもてなし、捌く。私たちが晩酌と寿司を楽しんでいる間もひっきりなしに電話が入り、息子さんが英語で対応する。「.. Yes. What time and how many? .. O.K. We' ll be waiting for you. .. Bye !」

気が付けば、ほぼ満席の店内で、私たち以外は皆海外からのお客さんだった。「おかげさんで、トリップアドバイザーで5つ星もらいましてな。こないだは市内の

群馬県太田市、県内初となる『ヘイトスピーチ禁止』を明記した条例施行へ（2025年6月2日掲載） プロジェクト研究「グローバルデザイン」

共愛学園前橋国際大学国際社会学部教授 西舘 崇

2025年1月1日、群馬県太田市において県内初となる「ヘイトスピーチ禁止」を明記した条例が施行された。条例の正式名称は「太田市民一人ひとりの人権が尊重された差別のない社会を推進する条例」である。制定は2024年12月。条例案は太田市議全員の賛成を得て可決された（※1）。

太田市では「互いを認め合い人権を尊重する社会の実現」を総合計画の基本方針の一つとして掲げているほか、「まちづくり基本条例」にて市民と市議会そして行政が「市民一人ひとりの人権が保障され、何人も差別されることなく、その個性及び能力が十分に発揮されるまちづくり」を行うことを定めてきた。今回の条例はこれらの方針をより具体的に示したものと思われる。群馬県の外国人住民数は2024年12月末に8万人を超え81,396人となったが、太田市は県内市町村の中でも伊勢崎市（16,389人）に次いで2番目に多い15,698人の外国人が暮らす。市はこの状況を踏まえ、2016年施行の「ヘイトスピーチ解消法」に準拠した条例を制定し、市として具体的な理念を示すことにしたようだ。なお条例はいわゆる「理念条例」であり、罰則規定はない（※2）。市のホームページでは現在、英語、スペイン語、中国語、ベトナム語、ポルトガル語の5ヶ国語訳で条例を読むことができる。

さて、同条例は全部で13条から成っているが、その概要を以下に記しておこう（※3）。第1条では、条例の目的を「人権が尊重された差別のない社会を推進することに関し、基本理念を定め、市、市民、事業者及び教育関係者の責務を明らかにするとともに、不当な差別の解消に向けた取組に関する事項を定めることにより、人権を尊重するまちづくりを総合的に推進し、市民一人ひとりの人権が保障され、何人も差別されることなく、その個性及び能力が十分に発揮される社会の実現に寄与すること」と定める。続く第2条は条例内における用語の定義である。本稿の関心から「不当な差別」と「本邦

外出身者に対する不当な差別的言動」の二つの定義を確認しておく。

〈不当な差別〉人種、民族、国籍、信条、年齢、性別、性的指向、ジェンダーアイデンティティ、出身、疾病、障がいその他の事由を理由とする不当な区別、排除又は制限であって、あらゆる分野において、権利利益を認識し、享有し、若しくは行使することを妨げ、又は害する目的又は効果を有するものをいう。

〈本邦外出身者に対する不当な差別的言動〉本邦外出身者に対する不当な差別的言動の解消に向けた取組の推進に関する法律（平成28年法律第68号）第2条に規定する本邦外出身者に対する不当な差別的言動をいう。

後者については、参照している法律をさらに確認しておく。本邦外出身者とは「専ら本邦の域外にある国若しくは地域の出身である者又はその子孫であって適法に居住するもの」であり、不当な差別的言動とは「差別的意識を助長し又は誘発する目的で公然とその生命、身体、自由、名誉若しくは財産に危害を加える旨を告知し又は本邦外出身者を著しく侮蔑するなど、本邦の域外にある国又は地域の出身であることを理由として、本邦外出身者を地域社会から排除することを煽動する」言動を指す。

第3条は条例の基本理念であり、それは「人権を尊重するまちづくりは、誰もが一人ひとり異なる存在であるという考えのもと、多様性を認め合い、不当な差別を解消し、互いの人権を尊重し合うことを基本として実施されなければならない」と明記されている。

第4条から7条までは関係機関などの責務が記されており、順に「市の責務」「市民の責務」「事業者の責務」そして「教育関係者の責務」が挙げられている。続く第8条は「禁止事項」（後述）であり、その後は人権教育及び人権啓発（第9条）、基本計画（第10条）、調査等の実施（第11条）、苦情等への対応（第12条）、委任（第13条）（※4）となる。

第8条の「禁止事項」には次の5点が挙げられている。

- ・何人も、不当な差別をはじめとする人権侵害行為をしてはならない。
- ・何人も、いかなる暴力及びハラスメントを行ってはならない。
- ・何人も、インターネットその他の高度情報通信ネットワークを利用する情報の発信に当たっては、日本国憲法の保障する国民の自由及び権利を不当に侵害してはならない。
- ・何人も、本邦外出身者に対する不当な差別的言動をしてはならない。
- ・何人も、人権を尊重するまちづくりの推進に関する施策を不当に妨げる行為をしてはならない。

本稿のタイトルにある「ヘイトスピーチ禁止」に直接関係するのが、この禁止事項の4番目に記された「本邦外出身者に対する不当な差別的言動」である。条例案の採決に先立って行われた太田市「市民文教委員会」での議論によれば、ここで同事項が個別に規定された理由は「多くの外国人が暮らす本市の特徴を踏まえ、外国人も含め全ての市民の人権が尊重された差別のない社会の推進のため」であったようだ（※5）。

さて、以上に見た太田市の条例にはどのような意義があるのだろうか。筆者はまず、条例にて記されたそれぞれの責務が太田市内にて様々な形で具体化され、実施されていけば、太田市民の外国人意識に対して直接的な効果が期待できるのではないかと考えている。例えば、2021年に実施された人権に関する市の調査によれば、「外国人が地域で生活するうえで、特に人権上問題があると思われるのはどのようなことですか。（複数回答）」に対し、「差別的な発言や行動」と答えた人が全体の36.8%で最も多かった。しかもその割合は、10年程前の調査（2012年調査）時の17.7%から飛躍的に伸びていることが示されている（※6）。条例の第8条4項はまさにこの懸案事項にダイレクトに応えるものであると言えよう。だとすれば、罰則規定はないものの、「何人も、本邦外出身者に対する不当な差別的言動をしてはならない」ということが、広く市民に周知されることの

意味は大きいのではないか。

条例はヘイトスピーチだけでなく、太田市民全体の人権意識の醸成にも影響を与えうと思われる。先に挙げた調査からは、太田市民の外国籍住民に対する人権意識が過去10年間ほどで約2倍以上高まっていることがわかっているが、社会に対する眼差しという点では「人権が尊重された社会」からはまだ遠く、10年前の意識からほとんど変わっていないことが示されている（※7）。そんな中であって、「人権教育及び人権啓発」を謳う第9条は、こうした状況を改善するための具体的施策や民間による様々な事業・企画など、さらには教育現場における授業作りなどを後押ししたり、それらに正当性を与えたりするものになるだろう。同条例に関連づけられた施策等については予算措置の一つの重要な根拠にもなるのではないか。

条例にはまた県内外に対する波及効果もあるだろう。とりわけ群馬県においては先述のように、外国人住民数が8万人を超えたが、その状況は「急増」といっても過言ではなく（※8）、この2、3年以内には10万人を超えることが予想される。そうした中であって、「ヘイトスピーチ」に関わる文言をあえて個別に入れた本条例が持つ意味は決して小さくないだろう。いずれにせよ、本条例の意義については、様々な先行研究からの知見を得ながら今後も考えていきたい（※9）。

最後になったが、太田市では2025年4月に市長選が行われ、新人の穂積昌信氏が現職の清水聖義氏を2102票差で破り（両者の得票数は穂積氏が3万5091票、清水氏が3万2989票）、新市長となった。太田市長の交代は実に30年ぶりとなる。清水前市長はこの数年、同市の多文化共生施策に新たな風を吹き込んでいたように思われる。その代表例は2024年12月に開所した「多文化共生センターおた」であり、本稿で取り上げた条例でもあった。新市長となった穂積氏はこの流れをどう引き継ぐのか。そしてその市政をいかに展開していくのか。今後も太田市の動きに注目していきたい。

※1. 太田市議会の議事録「令和6年12月太田市議会定例会会議録」や『市議会だより No.100』（2025年2月15日号）などを参照。

- ※ 2. 「ヘイトスピーチ禁止明記の条例制定 外国出身者や子孫に対し」『上毛新聞』（2024年12月14日）を参照。なお、地方自治研究機構によれば、ヘイトスピーチの禁止や拡散防止を条例で定めているのは、太田市を含め全国10自治体で確認されている。そのうち、川崎市「川崎市差別のない人権尊重のまちづくり条例」ではヘイトスピーチに対する罰則規定（刑事罰）が設けられている。同『上毛新聞』他、「ヘイトスピーチに関する条例」（一般財団法人地方自治研究機構）を参照。
- ※ 3. 条例の内容については条例本文のほか、その詳細については「太田市民一人ひとりの人権が尊重された差別のない社会を推進する条例逐条解説」を参照。いずれも太田市 HP から閲覧可能である。
- ※ 4. 第13条では、条例に定めるもののほか、条例の施行に関して必要な事項については、市長が別に定めることが記されている。
- ※ 5. 前出『市議会だより No.100』7頁を参照。
- ※ 6. 太田市（2021）『人権に関する市民意識調査結果報告書』（62頁）を参照。
- ※ 7. 例えば、同上の報告書によれば、「特にどの人権問題に関心がありますか。（複数回答）」に対して、「外国籍の人」を挙げている回答者は全体の20%であったが、その割合は2017年調査(8.2%)、2012年調査(9.3%)に比べ2倍以上となっている(同報告書、14頁)。その一方で「今の日本の社会は人権が尊重されている社会だと思いますか。（1つ回答）」に対しては「いちがいに言えない」を選んだ回答者が約7割で最も多く、過去2回の調査から大きな変化は見られない状況である。なお同じ質問項目で「そう思わない」と答えた人の割合は2021年調査では16.4%となり、2017年調査時の9.5%、2012年調査時の12.3%を上回っている（同報告書、17頁）。
- ※ 8. 例えば、群馬県の2022年12月末における外国人住民数は65,326人であり、前年12月に比べ4,577人増（前年比+7.5%）であったが、2023年12月末には72,315人で6,989人増（前年比+10.7%）、2024年12月末は81,396人で9,081人増（前年比+12.6%）であった。
- ※ 9. 例えば、筆者も参加した移民政策学会 2025年度年次大会における徳田報告（徳田剛「市町村が多文化共生に関する条例を制定することの意義—長野県安曇野市、静岡県静岡市の事例より」移民政策学会 2025年度年次大会報告（筑波大学6月1日））からは多くの有益な示唆を得た。

神楽坂から発信する『本物』の日本伝統文化体験（2025年7月31日掲載）

—日本の魅力を世界に伝える山田氏の取り組み—
プロジェクト研究「グローバルデザイン」

一般社団法人 日本グローバルイニシアティブ協会 綿貫 雅一

今回のエッセイでは、東京・神楽坂から本物の日本の伝統文化の魅力を世界に発信している株式会社 EDO KAGURA 代表の山田真也氏の取り組みについて紹介したい。



【世界に向けて「本物の日本文化」を発信する時代】

現在、日本の伝統文化が国内外から再び注目を集めている。特に、知的好奇心が旺盛で本物志向の強い欧米・豪州の富裕層旅行者の間では、「本物の伝統文化体験」へのニーズがかつてないほど高まっている。しかし、実際には観光地で見かける体験プログラムの多くはパフォーマンスや簡易な模擬体験にとどまり、真の「本物」に触れる機会は限られているのが現状である。

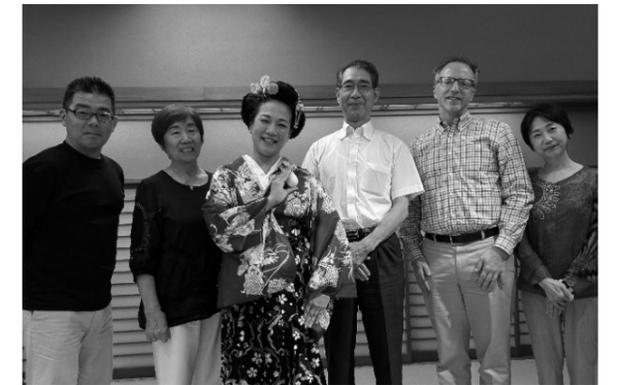
その中で、東京・神楽坂から「本物」の日本伝統文化を世界に発信しているのが、株式会社 EDO KAGURA 代表・山田真也氏である。山田氏の活動は、単なる観光やおもてなしの枠を超え、伝統文化の本質と魅力をダイレクトに伝える新しい発信の形を切り拓いている。

【発信の中核にある「本物」へのこだわり】

山田氏は兵庫県姫路市出身。大学卒業後、約30年にわたり金融機関で投資運用業務に従事し、富裕層顧客との豊富な交流経験を持つ。2021年に株式会社 EDO KAGURA を設立し、「NINJA KOTAN」「神楽坂雅遊」などの伝統文化体験ブランドを展開。自身も43か国・200回を超える渡航経験を有する旅行愛好家であり、

多様な文化や旅行者の感性を深く理解している点が強みである。

なぜ「本物」にこだわるのか。それは、彼自身が世界を旅する中で感じた「本物の文化担い手」との出会いが、最も心に残る体験だったからである、との弁。表面的なパフォーマンスではなく、文化の本質に触れる体験こそが旅の醍醐味であり、人生を変える感動となる。その信念が、山田氏の発信の原動力となっている。



神楽ごよみ「手妻の会」の一コマ
一番左が山田氏

【神楽坂から発信する伝統文化体験—「誰と体験するか」の重み】

2024年4月、EDO KAGURA は神楽坂を拠点に、インバウンド富裕層向けの本格的な伝統文化体験ツアーを開始する。能楽、雅楽、芸者、幫間、太神楽、手妻などの伝統芸能から、浮世絵摺り、組紐、染色、和菓子や茶道、和食、豆腐づくり、さらには座禅や居合道場体験まで、多岐にわたるジャンルを網羅している。

最大の特徴は、すべての体験が長年修練を積んだ本物の演者や職人による直接指導であること。「何を体験するか」以上に「誰と体験するか」に徹底してこだわり、体験者の知的な問いに専門的かつ深い知識で応じることができる。このようにして、単なる「イベント」ではなく、文化の核心に触れる「学び」として、日本伝統文化



【「伝統文化街道」構想—地方と都市をつなぐ新たな発信】

山田氏は、神楽坂からの発信にとどまらず、地方の「本物」の伝統文化とも連携し、日本全国をつなぐ「伝統文化街道」の構築を目指している。東京で出会った文化に感銘を受けた旅行者が、さらに地方を訪れ、その土地ならではの伝統芸能や工芸、食文化を体験する—そんな新たな旅の流れを発信し、日本全体の文化価値を高めていくことが目的である。

この発信の波は、体験者と職人・演者、さらには地域コミュニティの間に新たなつながりと活力を生み出し、地方創生の起爆剤にもなり得る。「本物の日本文化」を深く知った旅行者は、より質の高いリピーターとして日

本への理解と愛着を一層深めていくことが期待される。
【インバウンドで日本が再発見される今—未来へのバトンを手渡すために】

コロナ禍を経て、インバウンド観光は再び活況を呈しつつある。世界中の旅行者がいま、「本物の日本文化」に強い関心を寄せており、私たち日本人自身も、まだ知らない伝統文化が数多く眠っている。山田氏は「まずは私たち自身が体験し、学び、その価値を世界に発信していくことが重要です」と語る。数百年にわたり受け継がれてきた文化を、私たちの世代で守るのか、それとも失ってしまうのか—その責任と可能性は、今まさに私たちの手の中にある、と言える。

神楽坂発の新たな伝統文化体験は、日本の奥深い魅力を世界に伝える「文化の架け橋」である。また人口減少や流出、基幹産業の衰退が著しい地方においても、日本の伝統文化を掘り起こし、インバウンド観光へと繋げる取り組みは、ひいては持続的な地域発展にも寄与するものである。

山田氏のこのような強い思いと、日本文化の継承・発展に取り組む姿勢を、これからも応援していきたい。

豊田堰（小貝川）を訪ねて（2025年8月18日掲載）

プロジェクト研究「グローバルデザイン」

学校法人中央学院 常務理事 佐藤 寛



江戸時代の小貝川流域

出典：小貝川の治水と洪水の歴史 | 龍ヶ崎市公式サイト

今年の夏は日本全国で例年を上回る記録的な猛暑日が続出した。40℃を超える酷暑日の地点も複数観測され、高温と降水量不足が複合的に作用した結果、農作物に深刻な被害が発生している地域が報告されている。

このような状況の中、7月中旬に小貝川に位置する三つの堰のうち、豊田堰の現地調査を実施した。筆者は以前に福岡堰と岡堰を訪ねており、今回の訪問によって三つの堰すべてを訪れたことになる。

調査日は真夏の太陽が照り付ける暑い日であった。豊田堰周辺には小貝川で釣り糸を垂れる釣り人をひとり見かけたくらいで、他には人影もなく、コンクリート製の堰を横断する自転車や自動車が時折通過する程度で、全体的に静寂な環境であった。堰の周辺は見渡す限りの緑一色の水田が広がる。豊田堰周辺は、秋になるとまばゆいほどの黄金色の稲穂が垂れる風光明媚な景観を形成する。

豊田堰は小貝川を跨る取手市（右岸）と龍ヶ崎市（左岸）に設置された可動堰である。農業用水を初め、水害対策や河川維持などの水量調整のための重要な役割を担っている。現在、茨城県龍ヶ崎市豊田町に豊田堰管理所があり、その周辺地域の水田にはたゆまなく水を供給している。

江戸時代、新田開発を目的として小貝川に三つの堰が築造された。これらは福岡堰、岡堰、そして豊田堰であ



豊田堰

撮影：佐藤寛 2025.7.19

り、当時から三大堰と称されていた。豊田堰は徳川幕府の普請役伊奈忠治によって、寛文年間（1661～1672）に設置された。江戸幕府が新利根川開削時に水を霞ヶ浦に用水路を整備したが、水害が多いため用水路を締め切った。この部分に堰を設けたのが豊田堰の始まりである。その後、明治14年（1881）に木造り堰枠を設置、その後、明治34年（1901）には煉瓦造りとなり、さらに昭和52年（1977）に現在の姿の堰が完成した。総延長275mで河道全幅を可動堰として計6門からなる。

現在の豊田堰が完成したことによって、水害対策や灌漑用水など水量調整施設として安定した水供給により、龍ヶ崎市、取手市、河内町、利根町の2市2町の1,800haの水田を潤し、周辺地域は緑豊かな稲作地域となっている。



豊田堰から豊満に引水される用水路（二股に分水）

撮影：佐藤寛 2025.7.19



豊田堰調査中の筆者
撮影日：2025.7.19

今年の春から日本のスーパーマーケットやコメ屋の店頭からコメが消える騒ぎが起こった。「令和の米騒動」と称されるほど大きな問題になった。

政府は新たに農林水産大臣を充て、その対応に苦慮した。政府の備蓄米を放出することによって、一時凌ぎの対応に追われた。備蓄米は「古々古米」と呼ばれるもので、2,000円弱の価格で販売された。早朝から長蛇の行列で備蓄米を求める市民の姿が報道され、まさしくコメの生産調整政策の失敗が浮き彫りになった。

コメは単なる食料に留まらず、日本人の文化や生活習慣、さらには日本社会の基盤そのものである。第二次世

界大戦後には、食糧難を克服するために手賀沼や八郎潟をはじめとして日本全国で開拓事業が大規模に展開され、食糧供給の安定化が図られてきた歴史がある。

しかし、今回の米騒動は、コメが市場から姿を消し、価格が高騰する事態を招いた。これにより、日本国民は「コメがない」「コメが食べられない」「日本米がない」という未曾有の状況に直面し、これまでのコメに対する安心感が根底から損なわれている。

日本人にとって主食であるコメは、いつでも、どこでも、安価で、安心・安全の日本米があるという認識が、今回の米騒動で根底から揺らぎ、従来のコメに対する意識が国民の心に不信感が芽生えた。

先人たちは、豊田堰をはじめとする日本各地の水利施設を築き、干ばつや水害と闘いながら、利水と治水の両立を図ってきた。その努力が現在の豊かな稲作文化として「瑞穂の国」を日本に築き上げてきた。

今後、農業生産者が安定した稲作に取り組める環境、そして消費者が安心・安全なコメを購入することができ環境を構築するためには、持続可能な農業政策が不可欠である。

今後の農業政策の動向に期待が寄せられている。

日本人ファースト (2025年9月1日掲載) プロジェクト研究「グローバルデザイン」

中央学院大学社会システム研究所教授 福嶋 浩彦

「日本人ファースト」といったスローガンを選挙の看板公約に掲げた政党が大きな支持を集めたのは、今回の参院選が初めてだろう。

私たちと外国人の向き合い方を正面から議論するのは大変よいことだと考える。むしろ今まで不足していた。そしてその議論にはいろいろな意見があってよい。ただし、不正確な、あるいは事実と異なる情報をもとにした外国人攻撃につながってしまったら、それはとても怖いことだと考える。

●本当に外国人だけを優遇？

元「国連理事」のO氏が「ついに、日本政府が外国人留学生に返済不要の1千万円を配っていることがばれました。奨学金をもらった日本人学生は、社会人になってから苦勞して返済しているのに、返さなくていい1千万円だったら誰もが貰いたいですよね。」という主旨の話をしていた(街頭演説の動画)。

NHKの検証ニュース(NEWS WEB 2025.6.28)によると、これは文科省の「次世代研究者挑戦的研究プログラム」という制度のことで、大学院生(博士課程後期)全体を対象としている。当然、支給を受けているのは日本人が一番多い。支給を受ける外国人院生も多いが、外国人だけ得をしていると言うのは、間違った印象を広げることになるだろう。

SNSなどからの情報で、「外国人への生活保護は違法」と思っている人も結構多い。しかし、2014年の最高裁判決は、「外国人は生活保護法に基づく受給権を持たない」との判断を示すとともに、「行政措置による事実上の保護

の対象となり得るにとどまる」と述べている。つまり、法律上の権利はないが、行政が必要性を判断し支給することは認めている。

外国人を社会に必要な労働力として受け入れている以上、病気など様々な事情で生活できなくなったら知らん顔、では済まされないだろう。生活や言語、教育、医療などのサービスを充実させないと、必然的に様々な問題が起こり、治安も悪くなる。

なお、外国人に税金を使う面だけが強調される傾向があるが、外国人も日本人と同じように税金や社会保障費を払い制度を支えている。

●違う意見の人が話し合える場が大切

今日、これまでの社会の仕組みや価値観があらゆる場面で行き詰まり、大きな転換を迫られているように思う。そんな中で、物事を単純化し、一つ悪者を決めて攻撃し、市民の不満や怒りをあおって自分たちの支持を拡大するという手法が目立っている。少し前まで、高齢者に金をかけるから現役世代が苦しいと言われていたが、今は外国人のせいになったようだ。少し前まで、日本経済の停滞はデフレで物価が上がらないせいと言われていたが、今は物価高の中、消費税が悪い、財務省が悪いと声高に叫ばれている。

言うまでもなく物事はそんなに単純ではない。こういう時代こそ、様々な角度から事実をできる限り正確に理解し、多面的に議論していく姿勢が重要だ。とくに、意見の違う者同士が熟議し、試行錯誤しながら未来への選択をしていくことが大切ではないか。

参考文献

1. 小貝川の治水と洪水の歴史 | 龍ヶ崎市公式ホームページ (アクセス 2025.8.8)
2. 「農村工学研究部門メールマガジン」第176号(2025年1月号) 22
3. 豊田堰(龍ヶ崎市) / 利根西部地区 経営体育成基盤整備事業(利根町) - いばらきの農村発見 (アクセス 2025.8.12)
4. 美土里ネット豊田新利根 <http://toyodashintone.com/> (アクセス 2025.8.12)

『見えない壁 北方四島の記憶』を刊行して（2025年9月18日掲載） プロジェクト研究「危機の中の境界地域—稚内・根室・八重山列島を事例として」

毎日新聞社会部北海道グループ根室 本間 浩昭

私は、端っこが好きだ。だし巻きやチャーシュー、魚の切り身の端っこ、豆腐の角など、パイキング料理であればプレートに残りがちの、まさに端っこが好きなのだ。もちろんパンの耳も好物で、よく食べる。

食べ物だけではない。端っこがやけに好きなのだ。そのせいもあって、大学卒業前後は、タイービルマ（現ミャンマー）や東欧諸国のボーダーを旅した。毎日新聞入社後は、本土最東端の北海道根室市を拠点に、足かけ36年、根室海峡に立ち塞がる“見えない壁”を定点観測している。見えない壁とは、80年前のポツダム宣言受諾後にソ連軍の侵攻を受けて不法占拠されてしまった北方領土との境界線、根室海峡の真ん中を東西に分かつびつなラインのことだ。

ベルリンの壁や朝鮮半島の北緯38度線のように、目に見える壁ではない。だが、ひとたび壁を越えようとする、銃撃・拿捕・拘束されかねないという点では同じである。英語ではinvisible wall。この境界線は、1855年の「日露通好条約」によって択捉島とウルップ島との間に初めて引かれ、20年後の1875年の「樺太千島交換条約」で占守島とカムチャッカ半島の間引き直された。さらに1945年のソ連軍侵攻以降、後継国であるロシアが根室海峡の中間線まで実効支配をし続けている。壁は2度も動いているのだ。

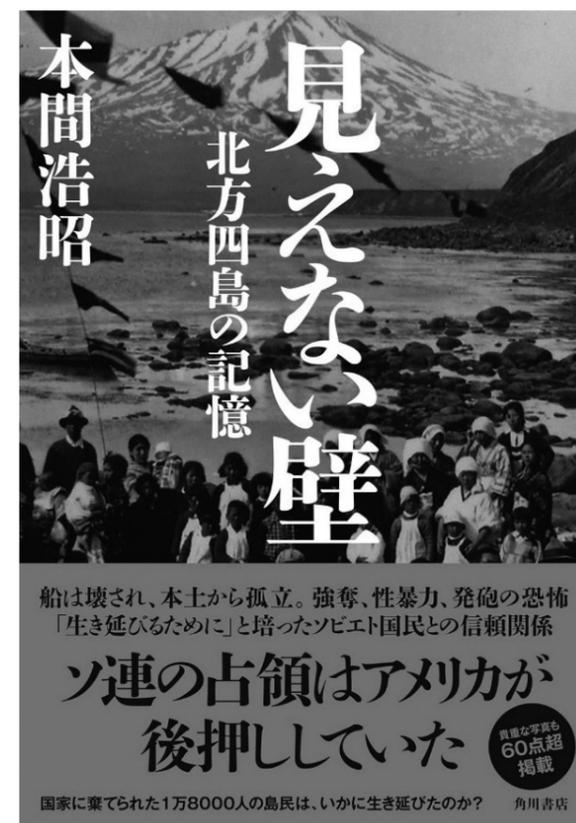


若いソ連兵のひざにちょこんと座って囲碁を観戦する張間葉子さん。
ロシア人写真家イワン・クワチ氏が択捉島で撮影した写真を張間さんが個人的に譲り受けた（張間さん提供）

現実的に長年、本土最東端で取材活動を続けていて思うことがある。それは、経済の浮き沈みの激しさだ。上下に大きく振れるバイオリズムのように、良いときと悪いときの落差が著しい。日露戦争後のポーツマス条約で日本はオホーツク海周辺の漁業権益を得た。だが、1945年の敗戦とソ連軍侵攻によって島を奪われ、オホーツク海の漁業権益はもちろん、北方領土に付属する水産資源を満足以漁獲できなくなった。かろうじて200海里漁業専管水域の施行以前は海は無限で、漁業者や市民もそれなりに潤った。しかし、その後は海が狭まり、米ソ冷戦のあおりを受けて経済が低迷、拿捕や銃撃も相次ぐ。根室海峡をはさんだ兩岸は、まるで仮想敵国のような状態になり、厳しい「冬の時代」が続いた。転機は、冷戦の終焉だ。日露の“氷河期”は終わりを迎え、隣国・ソ連、それを引き継ぐロシアとの交流や交易の扉が開いたのだ。ビザなし交流やカニやウニの輸入ビジネスも始まり、街は“間氷期”の訪れを歓迎した。だが、その“間氷期”もわずか30年ほどで終焉を迎えた。ウクライナ戦争によって日露間には再び氷で閉ざされ、いつ“氷河期”が終わるやも分からぬまま、街は一気にさびれつつある。このように何度もアップダウンを繰り返してきた。浮き沈みの振幅が大きいだけに、大きなニュースも多く取材するネタも豊富で、記者として活動するには、うってつけの場所なのだ。

そろそろ本書の紹介に入らないと紙面が尽きてしまいそうなので本論に入るが、本書は、根室海峡に「見えない壁」が築かれた約80年前、日本人とソビエト国民が最長で3年2カ月間、一緒に暮らしていた時代に「何が起きたか」を元島民から聞き取ったノンフィクションである。ソ連軍の侵攻直後に自力で脱出した家族もいれば、海の藻屑に消えた家族もいた。本土から遠く離れた択捉島では、脱出は極めて難しく、大半の島民は、2、3年後に樺太経由で正式に引き揚げた。習得の難しさでは、世界でも有数といわれる日本語とロシア語。言語、

風俗、習慣の異なる民族が、混住時代にどのように暮らしたか。最終章では、混住を体験した元島民の一人が考えるこれら島々の将来の共生策を紹介する。



2025年8月、角川書店。
四六版320頁、定価2,200円(2,000円+税)。

健康超人と神童に出会って！（2025年10月14日掲載） プロジェクト研究「グローバルデザイン」

中央学院大学社会システム研究所客員研究員 青木 章

◎立山・黒部アルペンルートの旅

昨年の退職に伴って、長い公務員生活を労う旅も台湾、北海道に続いて今回が3回目です。

戦後復興期において、深刻な電力不足に直面していた関西地方の状況を打開するため、関西電力は、約513億円（現在の価値で1兆円を超える）の巨費を投じ、急峻な黒部峡谷での水力発電所建設を計画し、厳しい自然環境の中で行われた建設工事は映画にもなりました。

私は、この一大事業の足跡をつぶさに見たいと思い、9月15日から17日までの2泊3日で、「立山・黒部アルペンルート」に行ってきました。

東京駅に集合し、北陸新幹線「はくたか」で富山に行き、富山県側から立山、黒部、白馬、上高地を巡り、松本から

特急「あずさ」で新宿に帰ってきました。

私はいつも一人旅ですので、どんな人に出会うか、隣の席にどんな人が座るかが、楽しみの一つでもあります。今回の旅で出会った「健康超人」と「神童」を紹介します！

◎「健康超人」との出会い

東京駅からの新幹線で同席した方は、神奈川県から参加された88歳の男性でした。この方は、東北地方から集団就職で関東に連れてこられ、5社ほど会社を立ち上げ、十数年前に奥様を不治の病で亡くしたそうです。

その時に「奥様の分まで健康で生きよう！」と決意し、お酒をやめ、味噌汁やスープなどの塩分の多い汁物もやめ、毎朝ラジオ体操をし、昼間はスポーツジムに通っているそうです。今は一人暮らしだそうです。

確かにアスリートのようにスリムで、贅肉はまったく無い体形です。でも所詮 88 歳のお爺ちゃんだと思っていました。

2 日目にケーブルカーや電気バスなどを乗り継いで黒部湖（黒部第四発電所）に着きました。ダムからは観光のための放水がされていました。この放水をダムの上からではなく、正面から見ようと思ひ、数百段、いやもっとあるかも知れない展望台への階段に向かって、集合時間もあるので、ツアーの人たちとは離れて、先を歩いていましたら、「青木さーん」という声がしました。

振り返りますと 88 歳のお爺ちゃんです。「どこへ行くの？」との問いに、「あの展望台まで行ってダムの放水を正面から見ようと思って！」と答えると、「迷惑をかけるかもしれないけど、私も連れて行ってください！」と言われました。集合時間もありますし、私自身 73 歳で自分のことで精一杯で、他人の事まで面倒見られない状況でしたけれども、お爺ちゃんの挑戦しようという意志を尊重し、一緒に階段を歩き始めました。

さすがに、少し遅れて待ったりしたこともありましたが、正面から放水を見て、何とか集合時間に間に合いました。私も若い振りをしていましたが、正直言って、やっとの思いでした。それに比べて、完歩した 88 歳は、「超人」の一言です。

それが縁で、二日目の夕食は一緒に取り、感謝されるとともにお酒をご馳走になりました。普段一人暮らしですので、会話をしながら一緒に行動できたのも嬉しかったようです。

夕食の時、人生の様々なお話を伺いました。昔で言う丁稚奉公から始め、当時の高度経済成長に乗って面白いように事業を拡大していったとのこと。今は息子さんに会社を譲って、悠々自適な暮らしの中で、「貯筋（肉）」をすることなどを話してくれました。確かに足腰を鍛えることで、死亡のリスクが減ることが話題になっています。私も、少しお腹を凹ませる努力をしなければ思いましたが、「体重を減らすとゴルフのボールが飛ばなくなる！」という屁理屈で自分を納得させています。

88 歳のお爺ちゃんの一途な想いと努力を聞いて、私も頑張らなければとの想いを新たにしたところです。

◎神童との出会い

電車の関係で、東京駅での集合場所に少し早く着いて受付をして待っていると、小学生らしき男の子と、お母さんらしき女性とお祖母ちゃんらしき女性のトリオが受付を済ませました。私は、小学校の授業もしていますので、15 日は祝日ですが、16 日、17 日は平日ですので、「僕、何年生？」と、つい声をかけてしまいました。すると「僕 3 年生」と笑顔で答えが返ってきました。

すかさず「学校は？」と聞くと、「先生に休むと言ってきた！」との答え、私も「そうか、たまにはそれもいいね！」と言いました。それがきっかけで 9 歳の 3 年生と仲良しになりました。お母さんとしては、お風呂の時に女湯に連れていくのも嫌がるし、かと言って一人で男湯に行かせるのも心配で困っていたそうです。

宿に着いた時に、「息子が青木さんと一緒にお風呂に入りたいと言っているので、お願いできないでしょうか？」と声がかかりました。

私としては、最近、孫も一緒にお風呂に入ってくれないので、「いいですよ！」二つ返事で返しました。熱いお湯は苦手ようでしたが、露天風呂でいろいろお話をしました。それからは、散策や食事なども一緒にするようになり、家族のような関係になりました。（私だけの勘違いですけど！）

この 3 年生、私がこれまで関わってきた小学校低学年の子とは、ちょっと違っていました。

ツアーのチェックポイントで添乗員さんが確認のための点呼をとったり、みなさんのご機嫌を伺うと、いち早く大きな声で反応します。

食事（バイキング）の時には、料理を運んでくれますし、私が箸を落とすと素早く替えの箸を持ってきてくれます。

散策の途中で外国人に会うと、自分から自発的に「ハロー」と声を掛けることができます。何にでも興味を示し、質問してきます。

でも川や池にいる魚を靴を濡らして追いかけたり、昆虫や草花に強い関心を示し、集合時間が迫っているにも拘わらず動こうとしなかったり、子どもらしい面もあります。

この神童には、これからも、積極性を大事にしながら、大らかに育って欲しいと願っています！

このツアーが縁で、「これからも会おうね！」ということになっています。

私と同じ「阪神タイガースファン」ですので、今度会う時には、知人である阪神タイガースの元監督の和田豊さんからいただいたグッズをプレゼントしようと思っています。

今回は、41 人のツアーでしたが、わざわざ岡山から東

映画『てっぺんの向こうにあなたがいる』を観ましたか？（2025 年 11 月 20 日掲載） プロジェクト研究「グローバルデザイン」

本年 10 月末に封切られた映画「てっぺんの向こうにあなたがいる」を、妻と観てきた。1975 年に女性として最初に世界最高峰のエベレストに登頂した田部井淳子さんをモデルとして、エベレスト遠征のエピソードを織り込みながら、がんを宣告され、闘病しながら、東日本大震災で被災した高校生を富士山に連れていく活動を続けた晩年の姿を丁寧に描いた映画である。

私も妻も、学生時代に山岳部に所属して多くの山に登った。私は大学卒業前の 1979 年 3 月にエベレストのベースキャンプまでトレッキングした経験もある。そういうわけで、田部井さんの名前は以前から知っており、映画で彼女のどのような姿が描かれるか、とても興味があった。



（© クラブツーリズム旅行情報サイトクラブログ）

映画では、吉永小百合さんが主役の「多部純子」を演じた。『文芸春秋』の 11 月号に、この映画について吉永さんが書いているが、それによると、吉永さんも若い頃に登山に親しんだとのことである。なるほどと思わせる、達者な山歩きのシーンが印象に残った。エベレストに挑戦した若き日の多部純子を演じたのは、女優ののんさん、エベレス

京まで夜行バスで来て、このツアーに参加し、また夜行バスで岡山まで帰る人など、多くの人と素晴らしい出会いがありました。

みなさんも、素敵な出会いを探しに旅に出ませんか！

中央学院大学現代教養学部教授 中川 淳司

ト登頂前後のエピソード、帰国してからのメディアへの対応や、登山隊の内部のもめごとへの対処など、実話に忠実に描かれた多部純子役を好演していた。とはいえ、この映画が最も丁寧に描いたのは、多部純子とその家族の絆だった。山にかけた人生を送る妻を陰になり日向になり支えた夫の正明（佐藤浩市、好演！）、有名人になった母に反発して家を出たが、がんと闘いながら富士登山のプロジェクトに打ち込む母に共感し、プロジェクトを支えた息子（若葉竜也）、母のよき理解者となったその姉（木村文乃）。中でも、登山が縁で結ばれ、妻が著名な登山家となってからの長い年月をともに過ごしてきた夫のひかえめだが誠実なふるまいと、そのような夫に対して多部純子が信頼と愛情をもって接している姿が心に残った。

スポーツの世界に限らず、若い頃に偉業を成し遂げたどのような人も、その後の長い余生を生きていかなければならない。田部井淳子さんは、見事に登山家としての人生を全うしたと思う。その意味で、彼女は尊敬に値する人ではあるけれど、彼女は一人でそれを成し遂げたわけではなかった。支えとなったのは、信頼と愛情で結ばれた家族、なかんずく夫の正明さんであった。今なお死病のイメージが強い癌と最後まで粘り強く戦いながら、登山家としての人生を精一杯生き抜いた彼女に、そして、それを支えた夫の正明さんに心からのエールを送りたい。

このところ、私も妻も登山からは遠ざかっていたけれど、近いうちに山に登ってみようと思う。2 人で何度も登った夏の奥穂高岳にしようか、それとも那須の茶臼岳にしようか。もう若くはないので、まずは筋トレと有酸素運動にしっかり取り組むことにしよう。来年の夏が今から楽しみである。

編集 後記

社会システム研究所のプロジェクト研究の学内公募が始まったのは2022年度である。学内公募最初のプロジェクト研究である「グローバルデザイン」と「危機の中にある境界地域—稚内・根室・八重山列島を事例として」がそれぞれ研究期間の最終年度を迎えている。どちらのプロジェクト研究も、共同研究であり、研究成果として図書が刊行される。その執筆作業などがあるため、今回のNewsLetterは、各プロジェクト研究メンバーの既発表のエッセイを再掲するかたちとなっている。